

トピックス

# 郵便局舎の再生事業—奈良県「郵便名柄館」—

井村 恵美

## 1 郵便局舎から郵便名柄館へ

葛城山、金剛山の麓に広がる奈良県御所市<sup>こせ ながら</sup>名柄は、水が豊かで米を中心とした作物の生産が盛んなほか、日本酒や醤油の醸造でも知られる。さらに一言主神社などが残る長い歴史を持つ土地であり、別名高野街道、一言主神社道とも呼ばれる街道が伸び、昭和初期には約80軒の商店が集まる要所でもあった。

この旧道沿いに建つ名柄郵便局の開局は明治35(1902)年と古く、郵便受取所として始まり、明治38(1905)年4月に名柄郵便局に改称して以降、小さな局舎のなかで郵便のほか貯金、保険、為替、電信そして電話事業を行ってきた(図1)。また、山間部を有するエリアの郵便事業の核となり、金剛山中には、郵便外務員が通ったルートに「郵便道」の名が残されている。

同局は明治、大正、昭和と長く地域に親しまれてきたが、昭和50(1975)年の移転に伴い局舎としての役目を終えた(表1)。その後国内最古級の木造局舎を保存しようという声上がり、平成27(2015)年5月に局舎は創建時の姿に再建され、「郵便名柄館」として生まれ変わり、新しい命が吹き込まれた。同年12月には郵便をテーマにした庭園も完成。お披露目式に併せて第一回「はがきの名文コンクール」の表彰式が開催され、グランドオープンとなった。

郵政博物館では、旧名柄郵便局舎の時代考証に加



個人蔵

図1 昭和初期の名柄郵便局

表1 名柄郵便局沿革

明治35年1月16日	郵便受取所として開設
明治36年12月	電信事務取扱名柄郵便電信受取所と改称
明治38年4月	名柄郵便局と改称
明治41年	集配局となる
明治43年12月	特設電話交換を開始
大正2年7月	現地に旧名柄郵便局舎新設(建設開始は明治末)局舎建設時の要員配置内務員局長含め5名、外務員5名の10名)
昭和29年	電話加入者の増加で局舎改築
昭和38年	電話交換業務廃止
昭和50年～	同局舎閉局→名柄郵便局を現地(奈良県御所市増)に移転

『特定郵便局原簿 奈良県』『通信六十年史』より

え、展示施設とカフェ空間のコンセプト設計に携わった。その取り組みについて紹介する。

## 2 旧名柄郵便局舎再生プロジェクト

同局舎は、池口亀太郎初代局長、池口順一郎二代局長の生家であり、現所有者の池口美代子氏から御所市が寄贈を受けたものである。母屋、複数の土蔵、納屋などのほかに街道側に郵便局舎を併設した土地となっている（図2、3、4）。

貴重な歴史的遺産として、平成25年度から国の助成金と堺屋太一氏（本名池口小太郎、奈良県御所市名柄出身）からの寄付金等により改修工事が開始された。

建物の保存にとどまらず、郵便の歴史を知る資料館と郵便局のように人が集うカフェを運営しようということで各有識者らを交えての再生プロジェクトとなった。

### 《プロジェクト担当》

- プロジェクト総括 御所市
- 設計・施工管理 御所市、畿央大学三井田康記教授、同環境デザイン学科
- 時代考証・調査 日本郵政(株)近畿施設センター、郵政博物館
- 資料調査 地元ボランティア、郵政博物館
- コンセプト設計 作家 堺屋太一氏、一般社団法人吐田郷地域ネット、郵政博物館
- 運営 一般社団法人吐田郷地域ネット



図2 畿央大学三井田研究室による模型

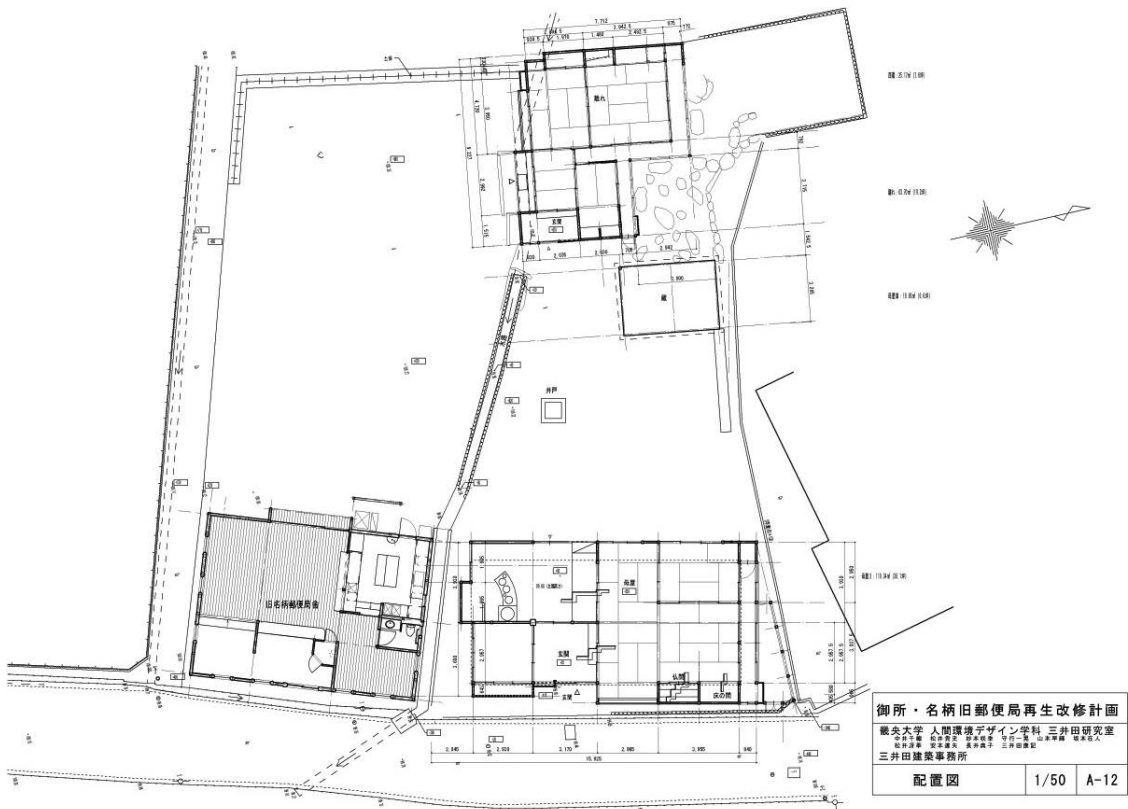


図3 再生改修計画後の名柄郵便局舎と池口家の配置図

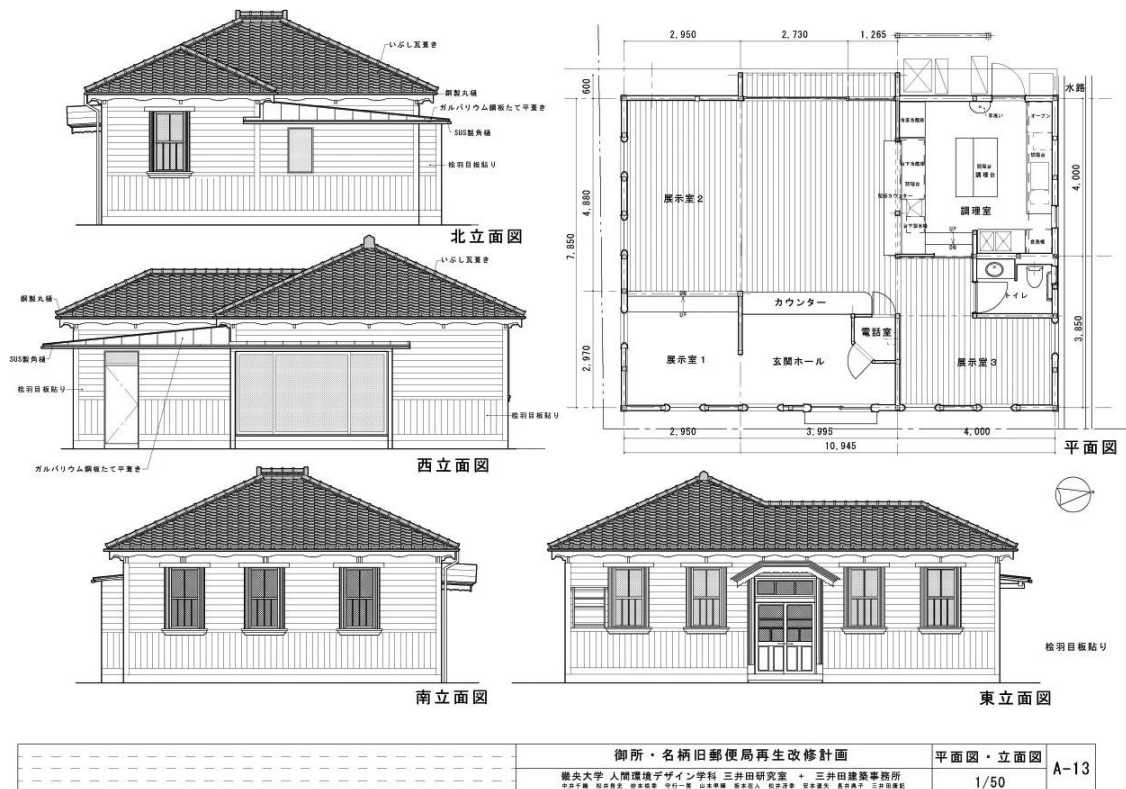


図4 再生改修計画後の局舎平面図・立面図

### 3 局舎調査と再生計画

旧名柄郵便局舎は、明治末期に建設を開始した木造平屋建て、寄棟屋根の建物である。洋風の外壁に瓦屋根の建物は、通称「擬洋風建築」とも呼ばれ、このような小規模な郵便局は、主に地元の大工や左官たちの手により建設された。同規模局舎の調査記録の検証に加え、畿央大学三井田研究室、日本郵政株式会社近畿施設センターにより塗装等の調査を実施した。建築当初の外壁塗装色については、劣化等により判明できなかったため、昭和初期の姿を知る地元古老への聞き取り調査を行なった。その結果、「淡い桜色」という記憶が主流だったため、その色調を元に再生が行われた(図5)。



図5 再生直後の局舎

公衆室や窓口カウンターのほか多様な事業を行った部屋割を考慮しつつ、建築当初の復元にはこだわらず、戦後に設置された玄関引き戸、電話事業拡充期の増築部分などは生かした(図6、7)。

また、劣化が著しい部分や防犯上問題が生じる窓枠等については、畿央大学三井田教授らの設計により、オリジナル部分を移設し保存するなどの工夫が施されている。

表2 現地調査結果概要

上げ下げ窓	通風と採光を考えた機能美にあふれたデザイン。両サイドの壁面内に滑車と錘よる仕掛けがあり、少ない力で上げ下げが可能な仕様。劣化や防犯のため窓枠は新設。オリジナル窓は、室内に移設。
玄関引き戸	「干」の意匠が組み込まれている。昭和初期の入口写真によると開き戸の可能性はあるが、この部分の復元はせずこのまま生かした。
レイアウト	建築当初の配置を意識し、増改築して設置された部分の一部は削除。
外装	建築当初の色が劣化により判断できなかったため、塚屋太一氏ははじめ戦前のようなすを知る古老を中心に聞き取り調査を行った。結果、淡い桜色の外観を採用。
内装	調査結果により白が基調となったことが判明。建築当初に戻す。
躯体	薄緑（内装）、灰色（外装）などの塗装色が残っていたが、その後の塗り直しと思われる。建材はあまりよいものではないが、元々別用途の建築物のあった場所に基礎などを再利用し局舎を新設した可能性もある。



図6 再生前局舎内装



図7 日本郵政の現地調査

#### 4 資料調査と再生計画

池口家母屋等の調査の結果、用品類から帳簿まで明治・大正・昭和に渡る継続的な郵便局資料が多く現存することがわかった（図8）。

局舎再生の建築工事が開始される前の平成25（2013）年から翌年にかけて冬期と夏期に複数回実物資料の収集と調査を実施した。地元ボランティアとともに母屋や土蔵などにある郵便局資料を洗い出した。発見時は、意匠が判別しにくいほどの汚れのある資料も多かったため、夏期に塗装部分や素材に配慮した洗浄作業、虫干し、紙類については燻蒸を実施した。

現在、郵便名柄館では、主にこの時の調査で発見された人車や周知宣伝物をレイアウトして展示を行っている（図9、10）。



図8 事業周知用の紙芝居

表3 名柄郵便局（池口家）関連の主な資料

人車（郵便車）	赤い郵便車は明治から戦後まで使用された。納屋の2階（現在は解体）に保管されており塗装状態の良い貴重なもの。
周知宣伝物	紙芝居等も完品で残っている。
絵葉書資料	明治末から昭和初期にかけての通信省発行絵はがきやその他資料が多く保存されていた。名柄局が開設時期の資料も多い。
郵便用品	昭和初期関西地区仕様の掛箱などもある。



図9 車輪を取り付けた発見時の人車



図10 展示室に設置している人車

## 5 新施設のコンセプト設計

郵便名柄館には「郵便資料館」と「テガミカフェ」という二つの機能があるが、大正2（1913）年創建の局舎の雰囲気伝えるべく大正期を中心とした調度品や郵便局資料を展示しており、当時のモダンな雰囲気を体感することができるよう設計した。

「郵便資料館」には、①郵便局の再現②日本郵便の歴史③絵はがきコレクション④名柄郵便局の歴史の4つのコーナーがあるが、名柄郵便局の歴史コーナー以外は、後述の「テガミカフェ」と併設のため、大正時代の食器棚の中に絵はがきや切手などの郵便資料を展示する手法でカフェ空間を彩る演出を行った。

そのほか「テガミカフェ」では、運営者の吐田郷地域ネットのメンバーにより提供される地元食材にこだわった定食「テガミランチ」の食後やカフェ時間にオリジナル切手やはがきを利用して、手紙を書くことができるサービスを展開している。そのために設置したのが、手紙グッズを収納できる専用机である。色調は、古い局舎にも合うよう古い塗装方法により古色をイメージしたものとし、ひきだしにはがきや筆記用具などを収納できるよう配慮した（図11）。



図11 手紙グッズを収納できる机

さらに名柄の食や文化を楽しみながら、「手紙を書く」「切手を貼る」「投函する」という“郵便体験”ができるよう、ポストの誘致を行い、日本郵便株式会社の協力により、郵便差出箱1号（丸型）が新設された（図12、13、14）。



吐田郷地域ネット提供  
図12 食と郵便で知る名柄



吐田郷地域ネット提供  
図13 思い出を書く手紙



図14 手紙を投函するポスト

## 6 むすびにかえて

全国には郵便局舎を利用した店舗が多くある。いずれも小さな空間が店舗として活用しやすいことと、誰もが気軽に利用できる郵便局ならではの機能がそれをかたちになっているのだと感じられる。和洋折衷のモダンな佇まいも一役買っているのだろう。

このような地元に根ざした局舎が、郵便局としての役目を終えた後も愛され、新しい命を得たことは、郵政の歴史に携わるものとして嬉しいことである。

また、当館の収蔵資料や情報の蓄積が、今後もこのような館外のプロジェクトに生かされ、手紙・郵便振興の輪が広がるきっかけになればと切に願う次第である。今回の再生事業では当館に残る資料から得られた情報が、現地で失われた記憶を埋める一助となった。

名柄郵便局舎のような大正から昭和初期にかけて設置された擬洋風のスタイルの郵便局建築については、まだ多く現存しているが、小規模郵便局の設計方法については不明な事が多く、各事例をとおして今後明らかにしていきたい。

また、収集した資料や聞き取り調査の整理はこれからである。明治から昭和までの郵便局運営の姿を伝える重要な資料であり、今後も調査を行っていく。

郵便名柄館の庭園中央には郵便配達夫の像がある（図15）。彫刻家吉野毅氏が、当館収蔵資料を調査した中で出会った一枚の写真、「郵便配達に誇りを持っている真摯な姿」にインスピレーションを受け創作した作品である。

そして、台座には作家堺屋太一氏のこのような詩が刻まれている。

一郵便は 喜びをつたえる 絆をふかめる 思い出をつくる それは今もここにある—  
この作品からは、郵便局に集う人の温かな思いが未来に引き継がれることを感じさせる。

最後に、このような機会を得られたことについて関係各所に厚く御礼申し上げ、郵便名柄館のますますの発展を願う。



図15 郵便配達夫の像